

岐阜県高山市方言



岐阜県方言区画図

【岐阜県の方言区画】岐阜県は、古来、美濃国と飛騨国の二カ国があり、それぞれに歴史を形成してきた。江戸時代には、美濃が尾張藩をはじめ所領に分割されて治められたのに対し、飛騨は、全域が天領であった。このことにより、岐阜県の方言は大きく美濃方言と飛騨方言にわけられる。

一方、岐阜県方言は、美濃と飛騨の一体性が見られるものと評されることが多い。飛騨は、越中（富山県）や加賀（石川県）など北陸地方とは、峻険な山で隔てられ、また、明治維新後一時期松本に県庁を置く筑摩県の一部であったとは言え、やはり冬期には隔絶される信州とはことばの面で異なりが大きい。反面、美濃との間には冬期でも通行可能な経路が多く、ことばの面での一体感は、交通により確保されてきた部分も多分にあるといつてよい。

美濃方言の特徴としては、否定形式に「～ン」の他、近畿地方から伝来した「～セン」やその変化形である「～ヘン」が、強意の意味なく用いられる地域が広くある。これに対し、飛騨地方では、否定形式は「～ン」ひとつである。また、概して、アスペクト形式の「～ヨル」（動作・変化の持続、以下、「持

続」と呼ぶ）と「～トル」（結果・持続）の使い分けは、飛騨地方に見られ、美濃地方では、郡上方言と東濃地方、それから中濃の一部を除いてあまり見られない。推量の形式については、美濃地方で指定の助動詞「ヤ」と同系列の要素を含む「ヤロー」「ヤラー」が用いられるのに対し、飛騨地方では、「降ルロー」のように、動詞に指定の助動詞を介さず「ロー」が付く形をとるなど差が見られる。また、東濃地方では、「降ルラ（一）」のような推量形があり、長野や静岡へとつながる特徴を呈する。

岐阜・中濃方言では、愛知県尾張地方の影響を強く受けている点も、方言的特徴を形成する上で大きな要因となっており、連母音「アイ」が「アエー[a:]」あるいは「エアー[e:]」へと融合する現象は、特に美濃地方南部に多い。一方、郡上方言及び飛騨方言では、このような連母音の融合は聞かれない。

【高山市方言について】高山市は、平成の大合併で東京都よりも広い面積を有する市となったが、ここで「高山市方言」と呼ぶのは旧市街地の方言である。おそらく、飛騨方言と言って、もっとも典型的に想起される方言は、この高山市旧市街地の方言である。

アクセントは、おおよそ東京式であるが、3音節形容詞断定非過去形がすべて中高型になるなど、岐阜市と同じく東京のアクセントとは全く同じではない。

文法形式に関して、高山市を含む飛騨地方では、美濃地方と異なり、持続の形式として「～ヨル」を用いることが多いが、「～トル」も持続と結果の形式として使われており、「～ヨル」のみで持続が表されるということではない。また、「車、ブツカリヨッタ」のような言い方で、かつては「ぶつかりそうだったがぶつからなかった」との解釈がなされていたが、現在の若年層では、この表現自体が廃れつつある。若年層では、「ぶつかりそうだった」場合、「ブツカリソーヤッタ」が使われるようになってきている。

動詞の否定形式については、伝統的に「～ヘン」を用いず、「～ン」で表す。これについては、現在、揺れも観察されており、「～ヘン」が聞かれることも

あるが、本来的でないとの意識もある。

尊敬形は、「行カッシャル・見サッシャル」などが伝統的であり記述も多いが、最近は衰退傾向である。また、「行カハル・見ラハル」も聞かれるほか、命令形では「行キナレ・見ナレ」など、「ナレル」系の形式が使われるなどもある。

【表記について】連母音の融合は起こらないため、特に特別な音韻表記は用いない。ガ行鼻濁音も用いら

れるが、ここでは、通常のガ行濁音として示す。

【調査概要】基本的に筆者(昭和40年岐阜市生まれ)の内省によって作成した例文を、高山市出身の70代男性に確認し必要に応じて訂正してもらった。ただし、例文の確認が間に合わなかった箇所もある。また、土田(1959)及び岩島(1996)のあげる例文を引用する場合は[土][岩]と記す。

岐阜県高山市方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル	クル	シル スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキナイ	ミヨ ミナイ	コイ キナイ	シヨ シレ セレ シナイ
	禁止	カクナ カカンナ	ミルナ ミンナ ミリンナ△	クルナ クンナ コンナ	スルナ シンナ スンナ△
	意志	カカズ カコ	ミーズ ミヨ	コーズ コヨ	ショーズ△ シヨ
	推量	カクロ カクラ カクヤロ	ミルロ ミルラ ミルヤロ	クルロ クルラ クルヤロ	スルロ スルラ スルヤロ
接続類	連体非過去	カク	ミル	クル	シル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カキャ カイタラ	ミヤ ミリヤ ミタラ	コヤ クリヤ キタラ	シヤ スリヤ セリヤ シタラ
派生類	否定	カカン	ミン	コン	シン セン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス	ミサス	コサス	サス
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル カカレル カケレル	ミレル ミラレル	コレル コラレル	《デキル》 シレル

	尊敬	カキンサル△ カキナル カキナレル カカッシャル カカッセル カカナハル カカハル	ミンサル ミナル ミナレル ミサッシャル ミサッセル ミナハル ミハル	キンサル 《オイデル》 キナル キナレル コサッシャル コサッセル キナハル キハル	シンサル シナル シナレル サッシャル サッセル シナハル シハル
	継続	カキョール カイトル	ミョール ミトル	キョール キトル	ショール シトル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクンヤ	ミルンヤ	クルンヤ	セルンヤ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik·uはkをQ(促音)にし「イツ-タ」。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das·u	ダイ-タ	sをiにする。ただし、「-シ-タ」となる場合もある。
t/c	立つ tac·u	タツ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin·u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キツ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	買う ka(w)·u	カツ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカジャ△ シズカヤ シズカナ	ガクセージャ△ ガクセーヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	推量	アカイロ アカイヤロ	シズカヤロ	ガクセーヤロ
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《ガクセーノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	中止	アコーテ	シズカデ	ガクセーデ
	仮定	アカケリヤ アカカッタラ	シズカナラ シズカヤッタラ	ガクセーナラ ガクセーヤッタラ
派生類	否定	アコーナイ アカイコトナイ	シズカヤナイ シズカデナイ	ガクセーヤナイ ガクゼーデナイ
	なる	アコーナル	シズカニナル	ガクセーニナル

	副詞	アコー	シズカニ	
	丁寧	アカイデス	シズカデス	ガクセーデス
	のだ	アカインヤ	シズカナンヤ	ガクセーナンヤ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

大きく、多段型動詞と、一段型に分けられる。おおよそ、多段型にはa類（「書く」・「居る」・「死ぬ」類）、一段型にはb類（「見る」・「起きる」・「開ける」類）の動詞が属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の5形、および、音便形がある。

一段型は、ミ-ル (mi-ru)、オキ-ル (oki-ru) など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル (ne-ru)、アケ-ル (ake-ru) など基幹がエ段の動詞がある。基本的に共通語と変わらないが、「起きる」など少数の動詞は、命令形で「オキレ」と、ラ行多段 (r 語幹) 型の形式をとるものもある。ただ、「見る」が「ミレ」となることはほとんどなく、このラ行多段型化は、語彙的に限定されていると考えられる。

不規則な活用をする動詞として、「クル」(来る)、「スル」(為る)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ (k-i-ta)、ク-ル (k-u-ru)、コ-ン (k-o-n) などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段にわたる。仮定形は、コ-リヤから類推された語幹をもつコ-レバを「標準語意識」をもって用いる。「スル」は、サ-レル (s-a-reru)、シ-タ (s-i-ta)、シル (s-i-ru)あるいはセル (s-e-ru)のように、基幹が「サ」「シ」または「サ」「セ」の2段で、より一段型に近い活用となる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は、「カク」「ミル」「クル」「シル」または「スル」となる。

- ・くどの灰をかく。(かまどの灰を掻きだす。)
[岩]
- ・今来るさ。(今行くよ。)[岩]
- ・ヒコネしると風邪をひくぞ。(うたた寝すると風邪を引くぞ。)[岩]
- ・風邪をひいたか背中がぞんぞとする。(風邪を

引いたか背中がぞくぞくとする。)[岩]

「来る」は聞き手の場所への移動の際にも用いられる。

〈断定過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は語幹に、「来る」「する」はそれぞれイ段形「キ」「シ」に「タ」を後接した形となる。

- ・風邪をこじやらかいた。(風邪をこじらせた。)
[岩] (「こじやらかす」(こじらせる)は多段型動詞で語幹末子音がs)
- ・谷がこけた。(谷が崩れ落ちた。)[土]

〈命令形〉

多段型動詞は、「カケ」のようなエ段形のほか、「カキナイ」のような基幹に「ナイ」を付加した形式も、丁寧な命令の意味で用いられる。

- ・ココニ ナマエ カキナイ。(ここに名前を書いて。)

一段型動詞、及び「する」は、いずれも基幹に「ヨ」が付くことによって、「ミヨ」「シヨ」が基本的な命令形として用いられ、「来る」では「コイ」となる。

- ・坊よあんやしよよ。(坊よ、あんよしよよ。)
[土]

また、基幹に「ナイ」を付加した「ミナイ」「シナイ」「コナイ」も丁寧な命令の意味をもつ。

- ・ホレ、ミダラシ カッテキタデ タバナイ。
(みたらし団子を買ってきたから食べなさい。)

一段型動詞の中には、「ミレ」「オキレ」「ヤメレ」のように、r 語幹型をとるものもある。「シル」も「シレ」となることがある。

- ・こいつをみれ。(こいつを見ろ。)[岩]
- ・早いことしれ。(早くしろ。)[岩]

〈禁止形〉

共通語と同じく、終止類断定非過去の形に「ナ」を付けて得られる形が基本的には用いられるが、一段型動詞と「来る」「する」及び多段型 r 語幹動詞では、「ル」が撥音化して「ミンナ」「クンナ」「シンナ」

あるいは「センナ」及び「キンナ」となることがある。

・ガッコーニ オクレンナヨ。(学校に遅れるなよ。)

そのほかに、多段型動詞ではア段形基幹に「ンナ」が付いた「カカンナ」などが、やや丁寧な禁止の形として用いられる。一段型動詞では「ミリンナ」などとなる形が[土]に報告されるが、現在では聞かれない。「シリンナ」「キリンナ」は確認されない。

・アブナイデ ホカランナ。(危ないから放らないで。)[土]

〈意志形〉

多段型動詞の意志形は、オ段の「カコ」となる一方、一段型動詞・「来る」「する」については、基幹に「ヨ」が付くことで、「ミヨ」「コヨ」「シヨ」となる。

やや古い形であるが「ズ」を付加して「カカズ」「ミーズ」「コーズ」の形でも意志を表すことがある。「シル」に対する「ショーズ」は稀である。

・そうして貰えばいわずことはない。(そうしてもらえれば言おうとすることはない。)[土]

意志形は、単独でも勧誘でも用いられるが、より強く誘う場合には、ア段の「カカ」に「マイ」を付加した「カカマイ」のような形式を用いることもある。一段型動詞は「ヨ」を入れて「ミヨマイ」となり、同様に「コヨマイ」「シヨマイ」となる。

・イッショニ リョコー イカマイ。(いっしょに、旅行に行こう。)

〈推量形〉

推量形は、それぞれ「カクロ」「ミルロ」「クルロ」「スルロ」のように、断定形に「ロ」を付けて表す。

・行くろ。(行くであろう)[土]

「ラ」を付加して「カクラ」「ミルラ」「クルラ」「スルラ」となることもある。

・明日がつ来るらも。(明日あたり来るだろう。)[土]

さらに、「ず」を付加する「カカズ」「ミズ」「コズ」「セズ」などの形でも推量を表すことがある。

・降らず。(降るだろう。)[土]

現代の若者は、おおよそ「カカヤロ」「ミルヤロ」「クルヤロ」「スルヤロ」など、断定形に「ヤロ」を付加する形で推量を表すのが一般的である。

〈連体非過去形〉

断定非過去形と同じ形である。

〈連体過去形〉

断定過去形と同じ形である。

〈中止形〉

中止形は、多段型動詞の基幹音便形など過去形と同じ形に「テ」を後接する。多段型動詞の音便形は、カ行、ガ行のほか、サ行でイ音便形の「サイテ」(指して)、「ダイテ」(出して)のようになる。「ハロテ」(払って)のようなワ行ウ音便はおこなわれない。

・カサ サイテ、ゴミ ダイテキタ。(傘をさして、ゴミを出してきた。)

〈仮定形〉

多段型動詞は、「カキヤ」のような拗音ア段形がもっとも多く使われるほか、「カイタラ」のようなタラ形も多い。「カキヤ」は、単独で勧奨の意味をもたないが、「カイタラ」は勧奨の意味にも用いられる。

一段型動詞・「来る」「する」は、「ミヤ」「コヤ」「シヤ」のような、基幹に「ヤ」を付けた形が基本となるほか、「ミリヤ」「クリヤ」「スリヤ/セリヤ」なども使われる。「タラ」については、多段型動詞と同じである。

・ココマデ {コヤ/クリヤ} マー アンシンヤワ。(ここまで来れば、もう安心だ。)

・オリワ ナニ {スリヤ/セリヤ} エーカナ。(私は、何をすればいいですか。)

〈否定形〉

否定形は、多段型動詞も一段型動詞も、「ン」を付加した「カカン」「ミン」「コン」「シン」となる。「する」では「シン」が一般的であるが、やや高齢の世代では「セン」も多く見られる。

・コレ タベンカナ。(これ食べない?)

・マンダ キトランノヤッタラ、キョーワ コンカモシレンナ。(まだ来ていないのだったら、きょうは来ないかもしれないね。)

過去では、伝統的な「カカナンダ」が用いられるほか、「カカンカッタ」のような、共通語の「かかなかった」との混交形と考えられる形式も使われる。条件では「カカンケリヤ」のような新しい形式もあるが「カカナ」のほうが一般的である。

共通語の「～ないで」のような否定接続形は、「～ント」のほか、「～ズニ」が使われる。この場合、「す

る」は、共通語と同じ「セズニ」の他、「シズニ」となるが、これには共通語という意識がある。

- ・ベンキョー {シズニ/セズニ} ネテマツタ。
(勉強しないで寝てしまった。)

古く行われた「～スト・～シト」の形は、老年層でわずかに聞かれるのみである。

- ・ナマエ {カカシト/カカスト}、トーアン
ダイテマツタ。(名前を書かないで、答案を出してしまった。)

〈丁寧形〉

「カキマス」「ミマス」「キマス」「シマス」が用いられる。「マス」は、過去形で「マシタ」、否定形で「マセン」と活用する。仮定形や推量形は確認できていない。

〈使役形〉

「カカセル」「ミサセル」「コサセル」「サセル」のような一段型の活用をする形も用いられるが、「カカス」「ミサス」「コサス」「サス」のような多段型の使役形がより一般的である。

〈受身形〉

「カカレル」「ミラレル」「コラレル」「サレル」のような形が使われる。この形は、一段型の活用をする。

〈可能形〉

多段型動詞は、ア段形基幹にレルを付加した「カカレル」も伝統的に保存されているほか、エ段形基幹にルが付いた「カケル」も用いられるが、より一般的にはエ段形基幹に「レル」が付いた「カケレル」の形が使われる。

- ・ソノ ヒワ ヨーガ アツテ イケレン。(その日は用があって行けない。)

一段型動詞は、基幹に「レル」が付いた「ミレル」「コレル」が使われる。「する」については、「デキル」のほかに「シレル」も聞かれる。

可能には、情動的に不可能であることを表す「ヨーカカン」も使われる。反語以外の肯定可能で用いられることはない。

- ・ショタイメンノ ヒトワ ニガテヤデ、ソ
ナ カイニワ ヨ一 イカン。(初対面の人は
苦手だから、そんな会には行けない。)

〈尊敬形〉

当地では多様な尊敬語形式が用いられる。

伝統的に、もっとも広く観察される尊敬語形式は、多段型動詞ではイ段形基幹に「ンサル」が付加される形で「カキンサル」のように使われるとの記述が見られるが、現代ではあまり聞かれない。

- ・ナマエ カキンサツタ。(名前を書かれた。)
一段型動詞と「来る」「する」では基幹に「ンサル」を付けた「ミンサル」「キンサル」「シンサル」が用いられる。

- ・センセーガ コッチ ミンサツタ。(先生がこちらを見られた。)

「来る」「いる」に対しては「オイデル」が一般的である。「オイデル」は、補助動詞としても用いられる。

- ・オキヤクサンガ オイデタ。(お客が来られた。)

- ・ナニ タベトイデルカナ。(何を、食べていらっしゃいますか。)

同じくイ段形基幹に「ナル」及び「ナレル」が付加される「カキナル」「ミナル」「キナル」「シナル」及び「カキナレル」「ミナレル」「キナレル」「シナレル」の形も多く見られる。

- ・ミンナガ ソー イーナレル。(皆がそう言われる。)

ただし、過去では、「ナレタ」ではなく「ナイタ」の形が一般的である。

- ・ミンナガ ソー イーナイタ。(皆がそう言われた。)

「シャル」や「セル」で尊敬形を表すこともある。「カカッシャル」「ミサッシャル」「コサッシャル」「サッシャル」及び「カカッセル」「ミサッセル」「コサッセル」「サッセル」などである。

- ・いかっしやる (行きなざる) [土]

その他に飛驒では、ア段型基幹に「ナハル」を付加した「カカナハル」「ミナハル」「キナハル」「シナハル」も用いられる。

- ・ナマエ カカナハツタ。(名前を書かれた。)

- ・センセーガ コッチ ミナハツタ。(先生がこちらを見られた。)

この「ナハル」から「ナ」が落ちた「ハル」も確認できる一方、ア段型基幹に「サル」を付加した「カカサル」なども聞かれるが、やや限定的である。

〈継続形〉

飛騨地方では、持続を表す場合、「ヨル」が用いられる。

- ・子どもがあくりょーる。(子どもが騒いでいる。)[土] (「アクレル」は「ふざけ騒ぐ」の意)
- ・おばあさんがきよいでる。(おばあさんが来つつある。)[土]

「キヨイデル」は、「ヨル」の尊敬語形である「ヨイデル」が付加されたものである。

ただし、「アクレトル」と言っても継続の意味になり、現在の老年層では「アクリョール」のようなヨル形は、やや衰退気味でむしろ「トル」で持続を表すことも多い。

- ・子供が道であすんどる。(子供が道で遊んでいる。)[土]
- ・あんねして今は贅沢しとるが……。 (あんな風にして今は贅沢しているが……。)[土]

一方、結果継続の意味では、もっぱら「トル」が用いられる。

- ・あれはお前にいこいとると見える。(あいつはお前に惚れているみたいだ。)[土] (「イコス」は「惚れる」の意)

〈希望形〉

多段型動詞の場合はイ段型基幹に「タイ」を付けて「カキタイ」となる。一段型動詞と「来る」「する」も「ヨミタイ」「キタイ」「シタイ」が用いられる。この形は形容詞型の活用をする。

- ・リョコーニデモ イキタイワ。(旅行にでも行きたいなあ。)

〈のだ形〉

共通語の「のだ」に相当する形式としては、「カクンヤ」「ミルンヤ」「クルンヤ」「セルンヤ」のような形が使われる。

- ・コンナ ゴミ イッタイ ドー セルンヤ。(こんなゴミ、一体、どうするのだ。)
- ・ドーシテ ゴザラナンダンヤ。(どうして来なかったのか。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

語幹末母音が「ア」の場合、「赤い」を例に採ると「アカ」のほか「アコー」が交替語幹となる。語幹

末母音が「イ」「ウ」「オ」の場合には、交替語幹は「嬉しい」の場合、「ウレシヨー」、「ぬくとい」の場合、「ヌクトー」となる。

〈断定非過去形〉

語幹に「イ」を付す。

〈断定過去形〉

「アカカッタ」などの形である。

〈推量形〉

断定非過去形に「ロ」を付けることで「アカイロ」のような形となる。「よい」の場合は「エーロ」のほか、「ヨカロ」とも言われる。また、近年では広く「アカイヤロ」「エーヤロ」の形も用いられる。

〈連体非過去形〉

断定形と同じ形である。

〈連体過去形〉

断定形と同じ形である。

〈中止形〉

語幹末母音が「ア」の場合、交替語幹が用いられる。「アコーテ」や「チーソーテ」(小さくて)のようになる。語幹末母音が「ウ」と「オ」の「サバイ」(寒い)や「ノクトイ」(温かい)の場合、語幹にそのまま「ーテ」がついて、「サブーテ」「ノクトーテ」のようになる。語幹末母音が「イ」の場合、オ段拗音を用いて「オーキョーテ」(大きくて)となる。

- ・コンナニ タコーテワ カエンワ。(こんなに高くては、買えないよ。)
- ・嬉ショウテしやない。(嬉しくてしかたがない。)[土]

「カエー」(痒い)の場合は、不規則に「カヨーテ」となる。

- ・セナカガ カヨーテ シヤナイ。(背中が痒くてしかたがない。)[土]

〈仮定形〉

一般的には、語幹に「ケリヤ」が付加され、「アカケリヤ」「ツベタケリヤ」のようになる。「ない」は、「ナケリヤ」のほか、「ナケナ」や「ナケニヤ」となることもある。

- ・ミズガ ツベタケリヤ オユオ ツカヤ エー。(水が冷たければ、お湯を使えばいい。)
- ・カネガ ナケナ カシタルワ。(お金がなければ貸してやるよ。)

「タラ」で条件を表すこともある。

・ミズガ ツベタカッター ヲオ ツカエ。(水が冷たかったら、湯を使え。)

〈否定形〉

語幹末母音が「ア」の場合、交替語幹が用いられ「アコーナイ」や「チーソーナイ」のようになる。語幹末母音が「ウ」と「オ」の場合、語幹にそのまま「ーナイ」がついて、「サブーナイ」「ノクトーナイ」のようになる。語幹末母音が「イ」の場合、オ段拗音を用いて「オーキョーナイ」となる。

・コノ トマト アンマシ アコー ナイ。(このトマトは、あまり赤くない。)

断定非過去形に「コトナイ」あるいは「コタナイ」を付加して否定を表すこともある。

・コノ トマト アンマシ アカイ コタ ナイ。(このトマト、あまり赤くはない。)

〈なる形〉

「ナル」に続く場合も、中止形同様、「語幹-ナル」が一般的であるが、語幹末母音が「ア」の場合、交替語幹が用いられ「アコーナル」となる。

・ブッカガ コー タコー ナツテワ セーカ ツモ デキンワ。(物価がこう高くなっては、生活ができないよ。)

〈副詞形〉

中止形から「テ」を除いた形を用いる。

・ココワ アコー ヌル。(ここは赤く塗る。)

〈丁寧形〉

「アカイデス」もなくはないが、方言としては、「アカイ」に「デス」を付けるのは、あまり自然な印象とは言えない。

〈のだ形〉

断定形に「ンヤ」を後接した「アカインヤ」などの形となる。

・アノウチ、ナンデ コンナニ ヤスインヤ。(あの家は、どうしてこんなに安いのだ。)

【形容名詞述語・名詞述語】

形容名詞述語・名詞述語は指定辞を付加して作られる。指定辞は「ジャ」が一部老年層で行われるが、すでに「ヤ」も広がりつつある。

〈断定非過去形〉

断定非過去形は「ジャ」又は「ヤ」を付加する。

・アサノ タカヤマワ シズカジャ。(朝の高山

は静かだ。)

・タローワ ガクセーヤ。(太郎は学生だ。)

断定形が「ナ」となることもある。

・黒う染めれば、狐のようなし。(黒く染めれば、狐のようだよ。)[土]

・アサノ タカヤマワ シズカナナ。(朝の高山は静かだな。)

〈断定過去形〉

形容名詞述語、名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、「ヤッタ」の形をとる。

〈推量形〉

形容名詞述語、名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、「ヤロ」の形をとる。

〈連体非過去形〉

「ナ」で名詞に続く。

〈連体過去形〉

「ヤッタ」で名詞に続く。

〈中止形〉

形容名詞・名詞に「デ」を後接した形になる。

〈仮定形〉

「静かなラ」のほか、「静かヤッター」も多く用いられる。

〈否定形〉

形容名詞・名詞に「ヤナイ」を後接した形になる。

・アンマシ ゲンキヤ ナイ。(あまり元気ではない。)

「デナイ」の形も多い。

・アンマシ ゲンキデ ナイ。あんまし元気ではない。(あまり元気ではない。)

〈なる形〉

形容名詞・名詞に「ニナル」を後接した形になる。

・クスリ ノミヤ ゲンキニ ナル (薬を飲めば元気になる。)

〈副詞形〉

形容名詞・名詞に「ニ」を後接した形になる。

・ボーガ ゲンキニ アソビョール。(子どもが元気に遊んでいる。)

〈丁寧形〉

形容名詞・名詞に「デス」を後接した形になる。

〈のだ形〉

形容名詞・名詞に「ナンヤ」を後接した形になる。

・アイツ マンダ ガクセーナンヤサ。(あいつ

は、まだ学生なのだよ。)

用例出典

土：土田吉左衛門（1959）『飛騨のことば』濃飛民俗
の会

岩：岩島周一（1996）『飛騨の方言』高山市民時報社

参考文献

奥村三雄編（1976）『岐阜県方言の研究』大衆書房

山田敏弘（2002）『ぎふ・ことばの研究ノート 第1

集 飛騨方言資料に見られる文法項目』私家版

（山田敏弘）